

3 特別寄稿

退職して



山口 彰

通常、退官した人の「特別寄稿」は研究の軌跡をたどりながらの研究生活の取りまとめ、育てた学生に関する思い出、研究や組織運営についての苦労話や失敗談などが多いと思います。もし私が何事もなくめでたく退職していたら、恐らくその様な話になったことと思います。私事に亘って誠に申し訳ないとは存じますが、心ならずも退職前に体験することになってしまったことのため氣勢を殺がれてしまい、なにかそれに類するものはとても書く気になれないのが今の心境です。

農林工学系に籍を置いたのは平成2年の夏からでした。勤務年数が長くないのが分かっておりましたので、現役最後のご奉公の場として、非力ながら悔いを残すことの無いよう全力でこの任務に取り組もうと思ってスタートしましたし、妻もその辺の事情は百も承知で、いろいろと支えてくれましたしアドヴァイスもしてくれました。勿論二人とも、めでたく退職した後は、子供達が家庭を持ってくれることや、育てた学生が社会に出て活躍してくれることを期待しながら、いっしょに旅行をしたり温泉に行ったりして、楽しく老後を過ごすことを思い描いていたのは言うまでもありません。後には安らぎの時間が控えている、今は色々大変なことが多くても一生懸命勤めなければと思いながら3年を過ごしました。後から思えばあの頃が私の筑波大学勤務における幸せな時であったのでしょうか。

自分の声の変調をはっきりと自覚したのは60才になった時でした。趣味で合唱をやっていたので、声の調子については人一倍神経を使います。どうもおかしい、もしかしたら喉頭癌ではと薄々疑ってはいましたが、3学期は講義担当がなく実験指導だけだったので、忙しさにとりまぎれてそのまま過ごしてしまいました。4月の新学期になり講義が始まってみると、自分でもいらいらするほど声の通りが悪く、さすがに意を決して附属病院の耳鼻咽喉科で診察を受けた次第です。それが専門医から見たら、将に喉頭癌を疑わせる状態だったので、組織検査のため即日入院手続きをとることになり、順番を待って8月に入院し声帯の組織検査を受けました。検査の結果癌でないことが判明し、大喜びで病院から小中学系長と研究室の黒田助教授に電話したものです。

これでめでたしと思ったのも束の間、今度は妻が急に体の不調を訴えて只事でない様子、調べてみたら何と卵巣癌がかなり進行しているとのこと、全く青天の霹靂でした。自覚症状で体が苦しいほどに進行した癌では先ず生還は期待できません。そのことを本人に隠したまま、つらい闘いの日々が始まりました。地位を

利用して云々と言ったようなことは決してしないよう心掛けてはいたのですが、この時ばかりはどうしようもなく、担当医の所へ出かけて入院・手術を早めてもらおうようお願いしました。重症の病人を自宅に置いたまま勤務に出ることは、殆ど不可能だったからです。毎日夕方は必ず、日によっては朝と夕方の2度病室に立ち寄って、話し相手と身の回りの世話をしながらの1年でした。妻にとっては一連の治療が終わり、翌年の4月から5月の2月程を自宅で過ごせたのがせめてもの救いであったと思います。再び症状が悪化して再入院してからは「その時」を待つのみでした。学類の運営委員をやっていたので、学類長が心臓の手術で入院され学類長代行の役を勤めることになり、妻の「その時」のカウントが始まったら代行の辞令が出たような訳で、恐らく私の一生の内最もつらい時であったと思います。

妻を送ってから定年までの1年半は、義務感のみで自分を支えていたと思います。筑波大学勤務の期間は必ずしも長くはなかったとしても、その間に体験したことは、ちょっと言葉では表せないような重いものでした。各学系の皆様方のご理解・ご協力のお陰で何かと勤められたものと感謝しております。最後の日は退職辞令を受け取り、関係のあった方々に挨拶をして帰った後、自分で赤飯を炊いて仏前に供えました。配偶者を失うと、それまで頭では分かっていたも、実感として気が付いていなかったことが見えてくるように思います。この様にしておけば良かった、この様に言うておいたら良かったとの後悔ばかりで、本当に至らなかったとの思いをどうすることも出来ません。安易に期待していた「安らぎの時」は私には配給されなかったようです。これからも何を目標に、如何に生きて行くのか模索を続けて行かなくてはと思っています。